



## ●総合的な学習 ●

# 人間形成のための国語科書写の追求

静岡県 静岡大学教育学部附属 静岡中学校（校長 村山 功）

### 〔研究のポイント〕

- ① 一人一人が自己を見つめる、自己肯定感に支えられた表現活動
- ② 他者との関わりを深めて心を耕す楽しい共同制作
- ③ 個性を育む原動力となる「交流展」でのメッセージの共有
- ④ 教科や領域間の融合を図る発展的な学習の展開

### はじめに

本学（静岡大学教育学部附属静岡中学校）は、静岡大学教育学部の7つの附属学校（静岡市と浜松市に小・中学校が各1校、島田市に中学校1校、静岡市に特別支援学校と幼稚園がある）の一つで、静岡地区の「先導的教育拠点」を担うべき附属学校の使命の実現をねらいに研究を進めている。

その一つとして、第3学年の総合的な学習の時間「追求」では、「教科の学びを発展的に追及し、自己の思いを深く表現したい生徒に応える」ため、大学教員らと本学教員とが協力して実践している。

「追求/書写」では、大学の書道教員の杉崎が協力し、「書写」を〈書くこと〉の領域と結びつけ、「文字を書くこと」の本質を理解することをねらいに表現活動を展開した。

### I 研究概要

#### 1. 研究主題

生徒一人一人が自己を見つめ仲間と相談しながら表現の工夫を考え取り組む「毛筆書制作」の活動を通して、他者との関わりを深めて心を耕し人間形成に寄与する「国語科書写」の可能性を追求する。

#### 2. 主題設定の理由

杉崎が中学生を対象に実施した調査では「取り組みたい書写活動」として<sup>(i)</sup>、「自分らしさ」を出したいという回答が圧倒的に多く、次に「様々な工夫ができる活動」を挙げていた。また、書写の技能に自信を持てず、苦手意識から文字を書くこと自体を億劫に感じるケースも指摘されている。

そこで、「追求/書写」では、文字の整齊さを追求することをねらいとした一般的な

書写ではなく、自己肯定感に結びつき生徒自身が主体的に取り組める活動を考えた。

### 3. 研究の経緯

静岡大学附属静岡中学校（通称：静中）の総合的な時間「追求」は、第3学年を対象に、「教科の学びの本質を知る」授業として、平成26年度より開講している。そのねらいは「教科の学びにおいて、より発展的に追求し、自己の思いをより深く表現したい子どもたちに応える」ことである。<sup>(ii)</sup>

平成28年度は、国語以外に、社会、数学等の各教科に関する講座が全部で11開講された。例えば大学の音楽教員が、ピアノや声楽のレッスンを行い、社会科教員が法律の解説をする等、専門分野を生かして関わっている。受講については事前に希望調査をし、5名から30名で人数調整のうえ決定して、毎週木曜日の第6校時に実施している。前後期ともに開講するので、多くの生徒が受講できるよう半期の参加を原則としているが、人数的に問題なければ通年の履修も可能としている。

静中では国語科を「言語や人間、社会、自然などについて自分がどう生きていくべきかなどを考えることができる教科」ととらえている。杉崎は、書写書道によって、これに貢献できると考えた。

また、杉崎が中学校の書写の方向性として示唆した「自分を見つめ自分を知り、自分を表現する」という新しい国語科書写<sup>(i)</sup>が、静中の取り組む「人間形成のための学力を育む授業<sup>(iii)</sup>」と結びつき、主体的な学びの保障にもつながると考えた。

「追求/書写」は、前期に12名、後期に17名が参加であったが、授業内で完結させるのではなく、そこで表現したメッセージを学内の他の生徒や他の附属校の児童生徒と

共有できるよう、発表の場として「交流書写書道展」を開催し成果を公開した。

### 4. これまでの主な取り組み

#### (1) 自己をみつめる

毎年、初回は、自分を見つめるために「今の一字」を書いてもらい、「題材設定の理由」と「表現の工夫」を絡めて自己紹介してもらっている。

「書」には、書いた人自身が投影されているため、「書」をみて、自分自身を知り、知つてもらうことからスタートする。通常の書写では問題にしない「書きぶり」に注目し、その書作品の趣き（書風、その書のもつ雰囲気）を感じることができると、お互いを知ることにつながっていく。

たとえ同じ文字を書いたとしても、書く人によって違うものに仕上がり、同じ人が書いても、一枚一枚書の表情は異なる。こうした書の一過性が「自分らしさ」の追求を可能にし、表現意欲を高揚させる。

#### (2) 線質を味わう

高等学校芸術科書道への接続を考えて、「線質」について説明を加えた。「線質」は「書道」という教科の本質として、書の重要な要素である。国語科書写では「筆使い」の学習の中の「送筆」として軽く触れる内容だが、ここでは、様々な「線質」を表現するための書き方を学ぶことになる。

始筆を露鋒（穂先が見える状態）にする書写文字しか知らない生徒にとっては、藏鋒（穂先を隠す状態）にして引く重厚な線や、鋭く打ち込む「方筆」の線、また始筆が太く送筆部分で細くなり終筆でまた太くなるような抑揚のある線など、表情豊かな線は新鮮だったようで、興味を示していた。

一つの筆で様々な表情の線が書けるとこ  
とに驚くとともに、筆圧や穂先のまとまり  
具合、点画のつながりを感じ取って書くと  
いう「筆使い」の基本も確認できていた。

### (3) 古典の臨書にチャレンジする

書写で扱う整齊な字形のもとになった  
「初唐の楷書」を紹介した。整齊でありな  
がら、書写のテキストの文字とは違って表  
情が豊かであるため、この臨書も、生徒に  
とっては印象的だったようである。

この際、一画ずつ墨つぎをせず「つなが  
り」を意識して書くこと、「にじみ」から「か  
すれ」へと自然に墨量が減り変化すること、  
それが時間の流れを感じさせ、遠近感や立  
体感にも結び付いていくことを感じとっ  
ていた。

### (4) 書きたい言葉をカッコよく書く

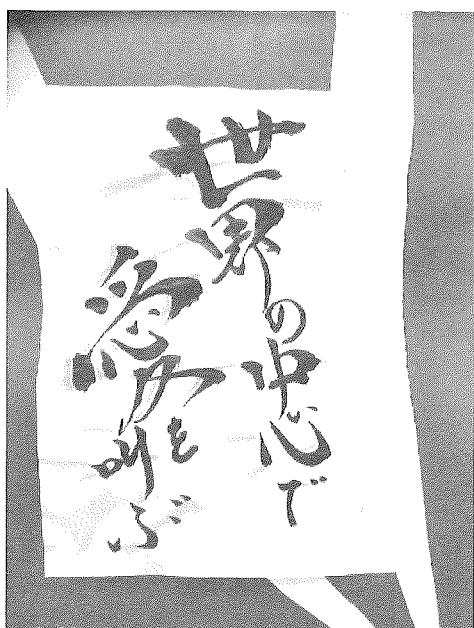
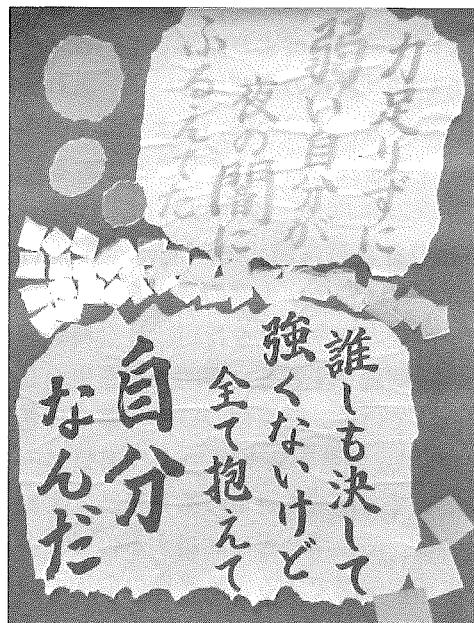
書きたい言葉を書くだけでなく、紙面構  
成や書きぶりを考え、色や装飾を工夫して、  
書を魅力的に仕上げた。高校受験を目前に  
した落ち着かない気持ちや将来の夢等、各  
自が思い思いに表現を楽しんだ。

#### 《生徒の感想》

- ・自分の好きなように表現するというのは初めてだった。はじめは「きれいな字」を書くことを意識した。
- ・「世界の中心で愛を叫ぶ」という言葉を、誰かに贈るプレゼントのようなデザインにした。こんなにも思いっきり変化させたことがなかったので、とても楽しかった。
- ・「毎日くだらないことで笑うこと。一日一笑。」と書き、顔に見えるように構成した。
- ・字を集めてハート型を作った。字の形を

考えた時、同じ字でもはらいの長さや、  
へんとつくりの並び方によって、より字  
が美しく見える。表現したかった感情を、  
より強く伝えられると思った。

#### 〔作品例〕



### (5) 「書本」作り

「絵本」は連なって絵が示され、それも含めて物語を展開する。その要領で、各自の「書」から文を紡ぎ「書本」を作成した。

まず書きたい言葉を書き、皆の「書」を鑑賞し合うところからスタートした。

例えば、「勇気」を力強い線質で大きく書くなど、書き手である生徒が意識的に表現を工夫する。それを見る人は、「勇気」の文字を受験勉強中の自分へのエールと感じるとかもしれない。また別の生徒は、「いじめをやめさせる勇気」だと受け止めるかもしれない。鑑賞者それぞれが、自分の思いを重ねながら見るなど、主体性をもった鑑賞をすることをねらったのである。



### 《生徒の文／例》

(書をつないで考えた生徒の文章)

- ・一日一日を大切に、向いくる全てのものと戦いつづければ、最後はなりたい自分になれる。はなひらく。継続は力なり。
- ・辛いことや苦しいことと戦い続けることで、いつか自分だけの華を咲かせることができるはず。今日という一日一日を戦い抜くことで、きっとその最高の瞬間と巡りあえる、きっと。
- ・卒業してから、もう一年がたつ。ふと思い返してみると、一日一日が華やかに彩られていた。たくさんの苦しみや戦いが、そして日々続けてきた努力が、今の私を咲かせている。

### (6) 大字書

半紙の倍の大きさの画仙紙に、通常の倍の筆で書いた。表現したい「思い」を主軸にして「書きたい言葉（文字）を自分が満足できるように書く」ことをねらった。

書き出しでは墨を多めにつけて、極力墨つぎをしないように注意を促すが、最初は不安げに、細めの筆で慎重に書いている。しかし、段々つながりを意識し、大きな画仙紙の「白」全体をとらえられるようになって、のびのび運筆するようになっていく。

大きな画仙紙に向かって筆を運ぶとき、生徒たちは自分の心の内を見つめることになる。進路のことで悩み、不安で圧し潰されそうになっている自分を励ましていたのかもしれない。

## 5. 平成28年度の取り組み

### (1) 大字の共同制作(書道パフォーマンス)

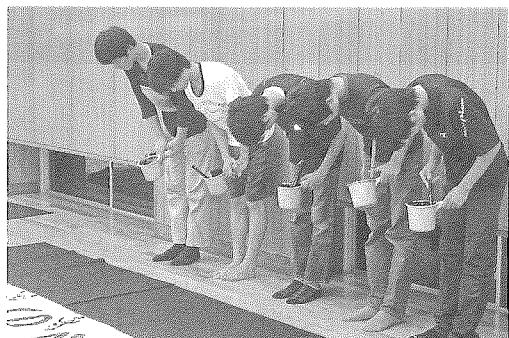
「書道パフォーマンス」は生徒の要望が最も多く、「追求/書写」を開始した年度の後期から、欠かさず取り入れている。これがやりたくて「追求/書写」に参加してくれるという生徒も少なくない。

ただ、パフォーマンスといっても、「追求」の授業内に毎時間少しづつ取り組むものであるから、高校の部活動で取り組んでいるような本格的な演技を伴うものではない。運筆のリズムや書くタイミングを仲間と共有するためのツールとして音楽があり、仲間と協力して「大字書」を書き上げる「大字共同制作」である。

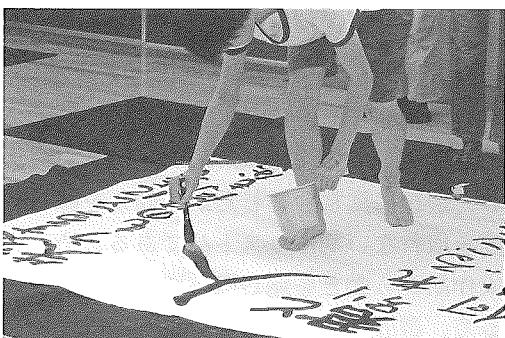
昨年度までは撮影したものをDVD編集し、最後に鑑賞会でしたが、動きを練る時間を取れない割にコスト高であるため、完成作品から動きを感じ取ってもらうこととして、書展への出品を最終目標に設定した。

《平成28年度 追求/書写 実践の流れ》

内 容
今の一字・自己紹介 (文字を書くことの意義)
発展的な学習内容のおさえ (書写と書道、用と美、伝達と表現)
書道パフォーマンス (グループ編成、テーマ設定)
書道パフォーマンス (活動把握、企画、検討)
書道パフォーマンス (実演、動画撮影)
活動振り返り
楷書古典の臨書（細字） 願書、履歴書（実用書）
思いを込めて書く (「感謝」「希望」など)
個人作品制作=「思い」を形に (半切3分の1、全紙2分の1)
展示作品鑑賞、感想の交流
しおり作成（書を身近に）



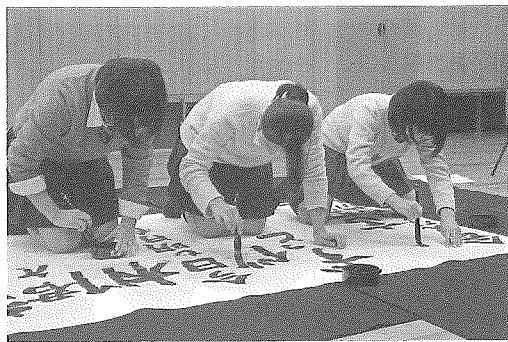
〔大字共同制作（書道パフォーマンス）〕



〔気迫の筆致〕



〔気持ちを合わせて〕



## (2) 思いを込めて書く

これまで「書きたい文字を書く」ことをしてきた「追求/書写」であるが、ここで初めて、あえて「題材を指定して書く」という時間を設けた。「感謝」「希望」の2つの課題を用意し、字形に悩むことのないよう、実物大の見本も用意した。

実は杉崎は、一週間前、同様の語句を課題として少年院入所者の中高生を対象に、「書初め」の授業をやっていた。彼らは、支えてくれている親や友人に送りたいという理由で、最も書きたい文字に「感謝」を挙げ、自分自身へのエールとして「希

望」という言葉を心を込めて書いていた。

このように課題語句が決まっている場合、一般的な「書写」では字形が重要視され、「思い」は全く問題にしていない。ところが静中の生徒達は、出来栄えをよくすることを意識しながらも、それを最終目的とはせず、言葉の持つ意味に導かれながら、自然な形で一画一画に思いを込めて「感謝」と書いていたのである。なぜなら、静中の生徒達もまた、卒業が近づく時期になり色々な人に「感謝」の思いを伝えたいと考え、また自分自身に対しては、進路のこと等に「希望」をもっていたかったのである。

こうして、書の持つ特質のうち、文字性と精神性とを感じ取ることができていた。

## (3) しおり(葉) つくり

実生活に生かせる書制作をと考えて、葉や下敷きを作成した。好きな言葉を書いてラミネートし、リボンなどを付けたものである。「愛」「彩」「夢」など、好きなことばを、好きな大きさ、形に書いて作った。

高校受験を目前にしている生徒たちは、「自信は努力から」「為せば成る」というような言葉を書いて、毎日手にする問題集や参考書にこれを挟み込み、自分自身を勇気づけていたのだろう。

〔生徒作品(葉、下敷き)〕



#### (4) 「附属校交流書写書道展」の開催

##### 「附属校交流書写書道展」

日時 平成28年11月16日（水）  
～平成28年11月25日（金）  
但し、11月20日、23日は休館日  
場所 静岡県教育会館ギャラリー  
＊静中の作品は一部9日から展示

この書展は、附属校6校の児童生徒の「書写書道作品」や「文字を書く活動の成果」を発表することによって、附属校の教育活動の一端を紹介し、交流を図ることを目的に実施した。

- 「書写」は国語科の学習であり、日常に生かすことが目的であるが、依然として「書写＝書初めなどの毛筆作品制作」という意識が残っている。伝統的な言語文化として、毛筆学習の充実を願う一方で、国語科や他教科の学習においても積極的に書字活動を取り入れてもらいたいと考えている。
- 附属各校の研究発表においても、その成果報告の多くは、教員が文章化したものである。研究成果を教員レベルで留めるのではなく、子ども達自身が文字や文章で書き記したものの発表が望まれる。子ども達自身の手書き文字での発表（公開）こそが、「生き生きとした成果発表」といえるのではないだろうか。

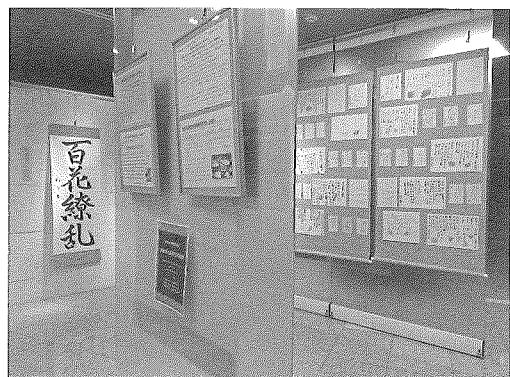
##### <参加校>

静岡中学校、静岡小学校  
浜松中学校、島田中学校  
浜松小学校、特別支援学校

- \* 会場に近い静岡中学校と静岡小学校では、児童生徒が会場に出向き鑑賞も行った。

#### 《交 流 展》

##### 【各校の研究成果をパネルに】



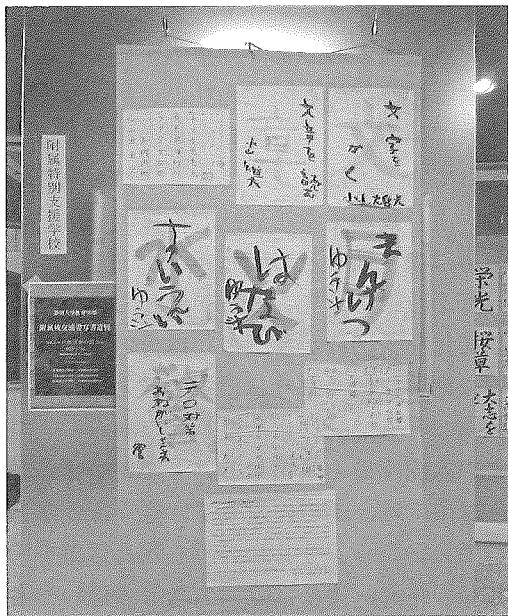
##### 【書初め作品も披露】



##### 【日常に生きる書（手紙）、詩を書く】



〔附属特別支援学校中学部生徒の書作品と  
便箋プリント〕



〔静岡中学校（個人大字作品）〕



〔書道パフォーマンス作品〕



## II 成果と考察

### 1. 成果（生徒の感想）

生徒の感想をみると、まず題材を考える時点で、主体的に取り組み自己をみつめ直していることが分かる。社会に向けたメッセージを導き出している生徒もまた、自分の生活と比較しているのである。

表現の工夫をする段階でも、「勢いよく書いた」、「命の確かさを伝えるために、点画をはっきりさせた」、「文字が正方形に並ぶようにして機械的な印象を与えるようにした」等、どうしたら、より自分の表現したいことが伝わるかを考えて、紙面構成や大きさ線質を工夫している。

### ○「大字制作」について

- ・ テストまで一ヶ月だというのに、全然勉強していない自分を表す言葉を書いた。
- ・ 思いつかないで文字化けを書いてみた。もう少し、バリエーションが欲しい。
- ・ 黄金に対する憧れがあったから。
- ・ これから的人生を本気で生きたいため。これまで本気と本気でない時の差が大き過ぎたけど、これからは差をなくし全てのものに本気でいくため。「本」を大

きくすることで、自分の決意を示すようとした。

- 世界では、尊い命が奪われる事件が起きている。そんななかで、人間一人ひとりの命、そして輝く生命を尊ぶ思いで、「生命の重さ」と書いた。
- 合唱で「虹」という曲を歌っているので、書道でも書きたかった。虹のように輝かせたいので、広く大きく書いた。

#### ○ 「パフォーマンスについて」

- 「軌跡」という字を要にして、両サイドに文字を書き、一画一画丁寧に、太細の変化をつけて書いた。ねらい通りにインパクトを出せた。
- 文字を書くにも書き方というものがあって、ワイルドに書くとか、丁寧に書くとか、色々な選択肢があることが分かった。自分の思いを字に込めるることは、すごく大切なことだと、書き終えて感じた。
- 個人の大字制作もパフォーマンスも、「楽しんで」できた。書道塾に行っていたわけではないけれど、自分名入りに美しい文字とはどういうものかを追求することができた。
- みんなで作り上げるのは、すごく楽しい。時間がなくて、あまり練習もできなかつたから「納得のいく作品」にはならなかったけれど、みんなで呼吸を合わせて書けたと思う。色々と考えていくときも、楽しかった。

## 2. 静中平成28年度研究テーマと追求

平成28年度、静中は、「共に創りあげる授業—思考力を育みながら『教科ならではの文化』を味わう子どもたち—」という研究テーマを設定した。そして、「教科で取

り組みたい人間像」を「よりよい人間関係を構築できる人間」であると考えてきた。

現在、インターネットの普及などによって、人と人とのつながりが広がるとともに、他者との直接的なかかわりの希薄化が指摘されている。いくら便利な世の中になったとしても、人は一人では生きていかれないし、より豊かで幸せな社会を実現していくためには、他者との関りが必要になる。

だからこそ、先人たちが残していった言語文化を大切にしながら、自分の考えを正確に相手に伝えたり、相手の考えを、その意図とともに受け止めたりしながら、よりよい人間関係を構築していく必要がある。

静中では、国語の授業を、様々な作品との出会いから、そこにつづられた言葉を吟味し、作者、または登場人物等の思いや考え方方にふれる営みと考え展開してきた。

さらに、仲間と語り合う活動を通して、共感や批判、疑問を抱いたり、自分の考えを深めたりしながら言語活動を豊かにしていくものと考えている。

今回の「追求/書写」においても、自らの思いを作品に表現しようと、仲間と語り合いながら活動に取り組んである姿は、正に、本年度の研究テーマに合致したものであったことを実証している。

## 3. 考 察

考察に先立ち、「文字を書くことについて」の生徒の考えを紹介する。

#### ○ 文字を書くことについての考え方

- ぼくが考える毛筆の真理とは、「静と動」だと思う。これを極めることにより、鑑賞している時にみた「生きている文字」を書くことができるのではないか。
- 文字には、その人の気持ちが表れると思う。目的に合わせて筆記具を変えるこ

とが大事だと思う。

- ・ 硬筆は太さが決まっているが、毛筆は表したいことによって、文字の太さを変えることができて、気持ちが表れやすい。穂先の動きをしっかり意識することで、気持ちを落ち着かせることができる。
- ・ 日本の伝統文化を今や未来につなげるのこと。そして、感じること。
- ・ 人間の誇る能力

文字を書くことは、本来、一人一人の内から沸き起こる楽しく自然な行動である。しかし、これまでの書写は、字形を気にしそ過ぎるあまり、規範的な文字にどれだけ近づけるかを重視して書き手の書きたい思いを置き去りしてしまっていたのではないだろうか。

ここで特筆すべきは、生徒自身が主体的に字形を改善しようとして、国語科書写の学習に取り組んでいたということである。

現行の中学校学習指導要領の国語では扱われない「表現活動」を行っているのに、生徒自身が、しっかりと学習指導要領にある書写を行い既習学習を確認していた。

「追求/書写」では、静中が継続的に取り組んできた「共に創りあげる授業」の実現が可能であったうえに、生徒一人一人が自らの「書くこと」に対する課題を見つけ、仲間と相談して工夫して表現できていた。さらに相互に評価し合って自分の見方・考え方を深め広げていくこともできた。履修者が書き文字で伝える思いを鑑賞者と共有できることによって、目的意識を持たせ、自己肯定感に結びつけることにもつながったのではないだろうか。

文字を書くことは言語能力を高めるだけでなく、表現するという側面において情操に働きかけて心を耕し、個性伸長を図る機

能を有している。

本研究を終えて、中学生のこころの問題を考慮して、「文字を書く」ことの原点<sup>(iv)</sup>に立ち返った国語科としての新しい書写学習、人間形成に寄与する「国語科書写」の可能性とが示唆されたものと考えている。

## おわりに

ある生徒が、こんなことを書いている。

…自分は文字を書くことが苦手で、特に毛筆は小学校3年生から全く進歩していないが、今はキーボードに打ち込めば済むからそれでいいと考えていた。しかし今回の制作・鑑賞を通して、考えを改めざるを得ないと感じた。同じ字を書いていても、どれもうまいのに多様性がある。一つ一つに味が生まれている。これに気が付いてしまったからには、文字に無価値ということは、もうできない。故に、これからは、人の書く文字の美しさを意識しながら、毛筆・硬筆それぞれに励んでいきたい。…

どうやら、彼は、文字を書くことの本質に目覚めたようである。今後も「追求/書写」を展開し、生徒たちの表現活動を応援していきたい。

(静岡大学教育学部：杉崎哲子)

(i) 杉崎「中学校国語科書写における硬筆指導の方向性に関する考察」『書写書道教育研究 第26号』全国大学書写書道教育学会 2011

(ii) 静岡大学教育学部附属静岡中学校『「人間形成のための学力」を育む授業—子どもが自ら学び続けるために—』明治図書 2013

(iii) 杉崎「附属静岡中学校「追求」による人間形成のための国語科書写の追求」『静岡大学教育実践総合センター紀要No.22』2014

(iv) 「書くことの意義と可能性」『教科開発学論集第1号』愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻 2013